

ベストセラー作家の帰還
 —— BBC ラジオドラマ脚本のマリー・コレリ考察 ——

桐 山 恵 子

はじめに

BBC Home Service とは、National Programme および Regional Programme を統合する形で 1939 年に発足し、1967 年に Radio 4 に取って代わられるまで存続したラジオ放送局である (Crisell, *Introductory* 54, 141, *Understanding* 25)。第 2 次世界大戦中に兵士向けの娯楽番組を放送していた General Forces Programme を引き継ぐ形で、1945 年に発足した Light Programme が “lowbrow” 志向、1946 年に発足した Third Programme が “highbrow” 志向とするならば、Home Service は標準的な教養をもつリスナーを対象とし、“middlebrow” 志向の番組を多く放送した局といえる (Briggs 296, Crisell, *Introductory* 62-4, Paulu 149-54)。

その Home Service で 1955 年に放送された番組に “The Corelli Comeback: the imaginary return of the Victorian novelist Marie Corelli” というものがある。これは心霊主義者として知られ、異世界との交信や死者の復活など、心霊主義に基づくエピソードを作品に用いた作家 Marie Corelli (1854-1924) が、没後約 30 年のロンドンに蘇るという設定のラジオドラマだ。コレリは没後、読者からの人気を急速に失っていったため、現在でこそ彼女の名を知る人は少ないが、ヴィクトリア朝においては “While Queen Victoria was alive, Miss Corelli was the second most famous Englishwoman in the world” (Masters 6) と言われるほどの有名人だった。さらに Rita Felski が “no previous novelist had ever secured such vast audiences or wielded so

much power” (115) と述べるほどの人気を誇っていた。その証として、生前のコレリは年間平均売上げ 10 万部を維持し、¹ 大半の小説は多くのヨーロッパ言語に翻訳されていたのである (Masters 9)。

多数のコレリ小説がベストセラーとなった理由として、彼女が当時興隆していた心霊主義を作品に取り入れ、同じ関心を読者と共有していたことがあげられる (Galvan 2)。心霊主義は不滅の魂および死後の世界の存在を強調しており (Noakes 26)、それをふまえたコレリ作品にはあの世からの訪問者が頻繁に描かれ、それら超自然的登場人物が引き起こす現象が作品を特徴づけていた (Felski 131)。よって現在のコレリ研究の関心のひとつは、作品で描かれる心霊主義に着目したものであり、たとえば Brenda Ayres 著 “The Story of a Dead Self’: The Theosophical Novels of Marie Corelli” では、*A Romance of Two Worlds* の病弱なヒロインが、治療の一環である催眠術で体験する心霊との交信が神智学の領域から論じられているし、Carol Margaret Davison 著 “Over Her (Un)dead Body: Gender Politics, Mediumship and Feminist Spiritual Theology in the Works of Marie Corelli” では、コレリ小説における女性死体の蘇りを考察することにより心霊主義とキリスト教との関連性を探求している。

また近年では、ストラットフォード・アポン・エイボンでのコレリの歴史的建造物保存活動をリテラリー・ツーリズムの観点から評価する研究もあり、Nicola J. Watson 編著 *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture* にも、コレリを扱った論稿が 2 篇収められている。² このように現在のコレリ研究では、作品自体の文学的価値を論じるというよりは、作品を通して当時の流行のありようを考察したり、作家本人の社会活動を評価したりするのが主流であるといえるが、そもそもコレリ存命中から、写実主義とはかけ離れた彼女の小説の特徴は、“a lush, verbose, diffuse style, wildly exaggerated, exuberant, exotic and colourful” (Masters 12) であるとされ、批評家からは軽視されてきた経緯がある。³ R. B. Kershner が “undoubtedly the major

reason we would exclude Corelli from the ranks of serious artists is her use of the related modes of sentimentality and melodrama within the framework of novelistic romance” (82) と述べるように、文学批評の場で作品が取り上げられることも少なくなり、ほぼ忘れ去られた作家となっていた。

実際、伝記的書物を除けば、既存のコレリ研究における唯一の単著は、2000年に出版された Annette R. Federico 著 *Idol of Suburbia: Marie Corelli and Late-Victorian Literary Culture* のみとなっている。研究書のタイトルが示しているように、フェデリコの主要な関心も作品自体ではなく、コレリを通じて後期ヴィクトリア朝の文化的現象を明らかにすることにある。とくに第1章 “The Queen of Best-Sellers and the Culture of Celebrity” では、有名人としてのコレリがイメージ戦略のためにいかにマスコミを利用したのか、また時にいかにそれらと対立したのかが論じられていて興味深い。さらにフェデリコと同様の関心をもつ論稿として Julia Kuehn 著 “Marie Corelli, the Public Sphere and Public Opinion” がある。マスコミを通して伝えられたコレリから読者へのメッセージは時に稚拙ではあったものの、積極的に公共圏に参加しようとした彼女の態度には評価できる部分もあるとされている。

当然のことながらコレリが用いたマスコミは小説や新聞、雑誌であり、1922年に公式放送を開始したBBCラジオに彼女自身が登場することはなかった。しかしマスコミとは不可分の関係にあったコレリが、1950年代には全盛期を迎えていたとされるラジオのドラマ脚本で (Crisell, *Understanding* 7, Paulu 9)、どのように描かれていたのかを考察することは、現在のコレリ研究にも有意義な視座を与えることができると考えられる。本稿で考察するドラマ脚本は、執筆者がストラトフォードのシェイクスピア・バースプレイス・トラスト資料館でコピーしてきたものであり、管見ではこれまでのコレリ研究でこの脚本に言及したものはない。⁴ 亡くなったはずのコレリがこの

世に蘇るといふ物語設定はフィクションだが、脚本内容はコレリの伝記的事実を踏まえて作成したものとなっている。そこで本稿では脚本でのコレリの描かれ方を伝記的事実に則して考察していく。さらにBBCの番組情報が記載された*Radio Times*の分析から、コレリ没後も彼女を取り上げた番組がラジオドラマ以外にもいくつか存在していたことを示したい。⁵

1. 「ベストセラーの女王」

最初にドラマ脚本の概要を紹介する。ニューヨークから飛び立った飛行機の離陸時にはいなかったはずのマリー・コレリと名乗る女流作家が、夜間飛行中に突如、機内で蘇り、1955年のロンドンに姿を現す。空港到着後、彼女は出版社と図書館を訪問、さらにゲストとしてラジオ番組にも出演する。最後に自身に関する不謹慎な記事を掲載した新聞社を訴えるため裁判所に向いた後、再び飛行機に乗って立ち去るというストーリーだ。

死んだはずの人間が蘇るといふ物語設定は絵空事ではあるものの、ここにはコレリが心霊主義者だったという伝記的事実が活かされている。出版社と図書館への訪問は、存命中、小説の需要動向を気にしていた彼女の態度を表しているし、ラジオ番組への出演は、マスコミの種類こそ異なるが、小説、新聞、雑誌をイメージ戦略のために利用していた現実のコレリの姿を思い起こさせる。マスコミはコレリにとって読者からの人気を獲得するための有効な手段でもあったが、その一方で不都合な真実を暴露しようとした出版社や新聞社とは対立することも多く、実際に裁判沙汰にまでなったこともあった(Masters 197-201)。脚本内での裁判所出廷はフィクションではなく、やはりコレリの伝記的事実を踏まえているのである。またラジオドラマ冒頭におけるアナウンサーの番組紹介コメント：“We present ‘The Corelli Comeback’ . . . A turbulent tale of literary revival—which should not, however, be taken too literally!” (2) は、コレリ小説が正統な文学としてはみなされてこなかつ

た批評的経緯を示しており、ドラマ脚本は完全にではないにせよ、ある程度コレリの実状を反映していると考えられる。

この世への帰還を果たしたコレリは、その足で出版社へと向かう。ところがその出版社はもはやコレリの小説を取り扱ってはいなかった。続いて図書館へと向かったコレリだが、ここでも図書館司書が開架書棚から見つけることのできた彼女の小説は *The Sorrows of Satan* 1冊だけであり、しかもその貸し出し記録は1年前に1度、その前は4年前に1度きりだった。*The Sorrows of Satan* 以外の本として *Vendetta: or the Story of One Forgotten* があったが、それは廃棄処分待ちという状況であり、コレリ小説の需要低下は明らかだったのである。憤慨したコレリは司書に詰め寄るが、司書は“Even in your own day, Miss Corelli, that was quite obviously melodrama” (18) と言い返す。またドラマの後半で登場してくる裁判官は、“The public loved my work” (29) と主張するコレリに対して、別のキーワードを用いてコレリ小説を批判する。“[A]ll the Victorian public wanted was merely sensational fiction. . . . Sensational fiction cloaked in religion and moral propaganda so that they, with Victorian hypocrisy would not feel uneasy in reading it” (29). 自身の作品にメロドラマやセンセーショナル小説というレッテルを張られてしまったコレリだが、彼女は執筆に関しては明確な目的をもっていた。出版社の編集者に向かって、“I wrote my books with a moral purpose. . . . All my work had a moral purpose” (18) と宣言したように、彼女は作品に読者への道徳的メッセージをこめていたのである。

コレリが固執していたヴィクトリア朝道徳が明らかになるのは、彼女の女性観が顕わになる場面だ。コレリは出版社で応対してくれた女性秘書の化粧された顔を見て、“I see by your painted face your mind is filled with the filth and dross of sensual delight” (11) と非難するのである。コレリにとって化粧した女性の顔は、娼婦のそれにしか思えなかったのだ。さらにコレリの女性観を裏付けるように、彼女がラジオ番組に出演する際に選んだトーク

テーマは“the Sanctity of Womankind” (21) だった。女性の純潔を“pearl of precious price” (21) にたとえたり、女性を“an angel clothed in a glory of love and pity” (22) と解釈したりするコレリの発言に周囲は失笑を禁じ得ず、まるでコメディ番組のようになってしまう。

脚本内の年代設定とラジオドラマ放送時が等しく 1955 年に設定されていることを考慮すると、ドラマで描かれるコレリ作品をめぐる出版事情や彼女をとりまく人々の反応は、この時点でのコレリ受容の実情を多少なりとも反映していると考えられる。脚本からは、コレリ小説の人气が著しく低下し、彼女の道徳的メッセージが人々に受け入れられていないことは明らかだが、ヴィクトリア朝に作品を通して読者へ語りかけていた現実のコレリは必ずしも嘲笑の対象とされるだけの存在ではなかったのである。Kirsten MacLeod が“The sensationalistic and moralistic aspects of the novel aimed to please her popular readership” (88) と言うように、彼女の小説は当時の読者からは好意的に受け入れられており、コレリが伝えなかった道徳的メッセージは、Jill Galvan が“Corelli is a transmitter of moral truths” (94) と指摘するように、彼女の読者には届いていたのである。

マスターズは、ヴィクトリア朝の「ベストセラーの女王」であったコレリとヴィクトリア女王との類似について以下のように述べている。

It is when the reading public realised that Marie was in some way the literary counterpart of their own dear Queen, and sought in her work to protect the same cherished values, that she was elevated in the popular mind to the position of an evangelist, a doer of good, a proclaimer of truth, a protector of virtue. (107)

「ヴィクトリア女王生存中、世界で 2 番目に有名なイギリス人女性だった」コレリは、その知名度において女王を追隨していただけでなく、ヴィクトリ

ア朝の美德を体現していた女王のように、道徳的なメッセージの伝道師の役割を自身の読者に対しては果たすことができていたのである。1955年のロンドンに一時的帰還を果たしたドラマ脚本のコレリが、彼女の作品を取り扱っていない出版社や数回の貸し出し記録しかない図書館での低い小説需要に憤るのも当然と思えるほど、ヴィクトリア朝におけるコレリは「ベストセラーの女王」としての地位に君臨していたのである。

2. 写真

すでに確認したように脚本内のコレリ小説の需要状況は、かつてはベストセラーだったとは思えないほどに惨憺たる状況だったが、マリー・コレリという人物に対する関心は依然、失われてはいなかった。機内でコレリが蘇ったとの噂を聞きつけたマスコミは、レポーターとカメラマンをロンドンの空港へ即座に派遣するのである。“She’s [Corelli is] news” (4) という新聞編集者の言葉が示すように、コレリ帰還の話題は充分に魅力的なネタだった。この世への帰還を果たしたコレリに向かって、レポーターは“Could we, er, have your views on space travel, Miss Corelli?” (6) と尋ねる。自身の小説で登場人物による時空を超えた移動を頻繁に描いてきたコレリは、レポーターに対して“I have already written of space travel. . . . You have read my novels?” (6) と聞き返す。しかし“I’ve glanced through one or two, madam” (6) と言葉を濁すレポーターは、コレリ小説を最後まで読み通したことはなく、ここでも需要がなくなっていることが分かる。

今やニュースとして取り上げる価値があるのは小説ではなく、没後約30年に再び姿を現したコレリその人だ。カメラマンは“Just one more smile, please, Miss Corelli. . . . For the evening edition, madam” (5) と声をかけ、撮影を嫌がる彼女の姿をどうにかカメラに収めようとする。その時コレリは“I will not be photographed without—” (5) と without の先を言いよどむの

だが、そこに続くはずの言葉は何なのだろうか。この問いの答えは脚本では明示されないため、コレリの伝記的事実に則して推測してみたい。

ヴィクトリア朝に台頭した写真は被写体をリアルに写しとる能力ゆえに、イメージ戦略を重視していた有名人にとっては看過することのできない媒体であった (Federico 21)。そしてベストセラー作家であったコレリも、自身が撮影された写真が読者に及ぼす影響をつねに懸念していたのである。コレリには、彼女の小説で描かれた若く美しいヒロイン像と自身のイメージを重ねあわせようとする戦略があった (Masters 4-5)。それゆえ、晩年になりコレリの容貌がヒロイン像とかけ離れていくにつれ、リアルな自分の姿がとらえられた写真を敵視するようになっていったのである。そして遂には、実年齢よりも相当若く見えるように修整を施した写真しか公表することを許さなかったのだ (Federico 38-40, Galvan 86, Kershner 71)。晩年のコレリにとっての写真が偽装されたものだったことを踏まえるなら、脚本内で彼女がその先を言いよんだ言葉は「修整 (retouch)」であった可能性が高いのである。

ところが空港でコレリを取材した新聞社側は、“The camera cannot lie” (4) を信条としたリアルな紙面作りを目指していた。そのためコレリの写真を修整することなく、そのまま新聞に載せてしまう。さらにその記事には“Marie Corelli clasps London to her bosom” (19) という見出しが躍り、年齢を重ねて肥満気味となっているコレリの身体のなかでも、とくに彼女のふくよかな胸が強調された写真が掲載されていた。読者に与える自身の美しいイメージを重視していたコレリが、この記事に怒りをあらわにしたことは言うまでもない。彼女は記事に対して新聞社を訴えることを決意し、ドラマは裁判所の場面へと移行していくのである。

3. 裁判

不謹慎な記事に対してマスコミを糾弾するための裁判だったにもかかわらず

ず、“And would you kindly allow me to feel that I am the plaintiff in this case and not the defendant?” (35) というコレリのセリフが示すように、裁判は開始直後から彼女に不利な状況で進んでいく。なぜならコレリには、そもそも自身の経歴をめぐる様々な詐称疑惑があり、それらを追求された彼女は明確な答弁を行うことができなくなってしまったからだ。Marie Corelli と名乗っているが本名は Minnie Mackay であること、家系においてイタリア人との血縁関係はないことなどが暴露されてしまう。さらに裁判官が、ロンドンからストラトフォード・アポン・エイボンに移住してからのコレリは、イタリア製のゴンドラを購入し、ゴンドラ乗りとともにエイボン川を遊覧することにより、イタリア出身を装っていたことを指摘すると、傍聴席は笑いの渦に包まれてしまうのである。

そして実のところ、ドラマ脚本で裁判官が指摘したコレリの詐称やエイボン川でのエピソードはフィクションではなく、すべて伝記的事実に基づいている。とくにゴンドラで川下りするコレリの滑稽な姿は、当時、大変な話題となり、その姿を描いたポストカードまで売り出されていたのである (Masters 228)。しかしながら、永住の地となったストラトフォードで、実際にコレリがなしたことは、嘲笑の対象となるようなことだけではなかった。というのも、現在、当地はシェイクスピア生誕地およびエリザベス朝の建造物が保存された美しい街並みの観光地として有名だが、“Marie’s interventions had a very real and lasting effect on the development of Stratford and cemented her legacy as an important conservationist of the town’s architectural heritage” (Birch 27) と評されるように、コレリが当地に関わらなければ、ストラトフォードの街並みは今と同じではなかったのである。コレリは歴史的建造物が取り壊しの危機に陥った際、私費を投じてそれらの家を守ると同時に、必要な際には自身の政治力も用いて街並み保存に奮闘した。たとえばアメリカ資本によるカーネギー図書館の建設用地として、シェイクスピア生誕地に隣接したエリザベス朝の家々が破壊されそうになっ

た時、建設を支持するストラトフォード市政に対抗し計画を変更させることに成功した (Birch 23-5, Masters 184-201, Tracy 23-32)。またコレリは歴史的建造物の保存価値を広く訴えるために、建築専門家を雇入れて家々の調査を行い、それに基づいたパンフレットの出版を行ったりもしたのである。⁶

ドラマの裁判場面でのコレリも、ストラトフォードの街並み保存のために自身がなした多大な貢献を認識しており、以下のように弁明する。

Not only the old houses of Stratford but all your historic buildings throughout the kingdom are now guarded and respected by a National Commission. . . . Stratford has now become what I always wanted it to be——a world center for Shakespearean scholarship and dramatic production. (38)

ところが裁判官はストラトフォードでのコレリの行動に関して、“all you ever wanted to do was to satisfy your own vanity” (37) と結論づけ、彼女の果たした貢献を一切認めようとはしない。逆上したコレリは“I cannot suffer to be with you a minute longer. Good-bye!” (38) と言い放ち、裁判所を立ち去ってしまう。そして続く最終場面は、再び飛行機の中となる。“[T]here’s no coming back to this sort of world. I’m going on…” (39) というコレリのセリフとともに、飛行機が上昇していく効果音が鳴り響く。蘇りを果たしたコレリのロンドンへの一時的帰還を描いたラジオドラマは、これにて幕となるのである。

4. ラジオ番組

Radio Times には本稿が考察してきたラジオドラマ以外にも、コレリを扱った番組がいくつか掲載されている。本節ではそれらを紹介してみたい。

ドラマ以前に放送された番組として、1949年 Light Programme による “New Books and Old Books” があり、コレリ小説 *Barabbas* の紹介が行われている。1962年に Home Service で放送された “Indian Summer” には、“Advice and entertainment for retired and older people and a meeting place on the air for those concerned for their welfare” という但し書きがついており、高齢者志向の番組であることが分かる。実際、番組内では “On Drinking Enough: Some more advice from the doctor” というお年寄りへの健康アドバイスとともに、“*The Sorrows of Satan: A reading from Marie Corelli’s Book*” が行われている。

ここでドラマ脚本に再び立ち返ってみる。というのも、脚本内でもかろうじてコレリ読者として存在しているのは高齢者であることが示されているからだ。たとえば裁判所の場面で、自身の小説には需要があるはずだと言い張るコレリに対して、裁判官は “Your books are read, yes. But only by the very few—the older generation who I have no need to remind you, Miss Corelli, are getting fewer and fewer as each day passes” (27) と返答している。さらに図書館司書も次のように述べている。

You [Corelli] are still read, but only, I fear by the few. By those who still remembered when your novel first appeared. They like to make sentimental return to their younger days. Time has changed since then. (14)

今や齢を重ねた読者は、コレリ的小説世界で描かれたヴィクトリア朝を懐かしむと同時に、若かりし頃の自分たちの過去を追憶していることが、司書によって述べられているのである。このようにラジオドラマとラジオ番組 “Indian Summer” のいずれにおいても、コレリの没後、彼女の小説に関心を持ち続けていた人々は高齢者が多かったと推測できる。

Radio Times には、“Indian Summer”放送以降もコレリに関する番組の記載があるが、小説というよりはコレリという人物に焦点を合わせた内容が増えていく。1964年にHome Serviceで放送された“The Interval Memories of Marie Corelli”では、“People of Stratford-upon-Avon recall the author of *The Sorrows of Satan* and other romantic novels as she was during her last years”と生前のコレリを偲ぶ内容が扱われている。1978年Radio 4による“Woman’s Hour”では、番組内容の一部として、マスターズ著のコレリ伝記本 *Now Barabbas Was a Rotter: The Extraordinary Life of Marie Corelli* が取り上げられている。そして1980年Radio 4による“Women of Words: Portraits of five women writers”と題された番組では、先の伝記を著したマスターズ本人⁷がゲストとして登場している。マスターズの著作は伝記としては現在でも最も信頼が高いとされており、信憑性に足るコレリの伝記的事実の開示は多少なりとも彼女への関心呼び起こしたのではないだろうか。

終わりに

死んだはずの人間が機内で蘇ることから始まるラジオドラマ脚本は、一見、完全なフィクションのように思われる。しかし本稿が示したように、ドラマの物語設定はコレリが心霊主義者だった事実を活かしたものとなっていた。そして脚本内で出版社や図書館を訪問したり、「修整」なしの写真に掲載した新聞社を訴えたりするコレリは、存命中、小説の需要動向を気にかけて、マスコミ対策に腐心していた実際のコレリの姿と重なりあうのである。さらに裁判官が指摘したコレリの経歴詐称が事実であったのと同様に、彼女が弁明として用いたストラトフォードでの建造物保存活動は、ヴィクトリア朝のみならず現在の当地でもその功績が認められるほど大きいものだったのである。

このようにコレリの伝記的事実を巧みに取り入れた脚本は、心霊主義者としてのコレリ、マスコミとの関わり方、ストラトフォードでの活動といったような、現在のコレリ批評の関心のありようをも反映したものとなっていた。ヴィクトリア朝ベストセラー作家のこの世への一時的帰還を描いたラジオドラマ脚本は、コレリに新たな関心を抱く現在の研究者にとっても有意義な視座を与えてくれるのである。

注

1. たとえばコレリと同時期に活躍した人気作家 H. G. Wells や Arthur Conan Doyle の年間平均売上げ 1 万 5 千部と比較しても、彼女の人気は際立っていた (Masters 6, Scott 233)。
2. Julia Thomas 著 “Bringing Down the House: Restoring the Birthplace” および Gail Marshall 著 “Women Re-Read Shakespeare Country”. トマスはコレリのストラトフォードでの歴史的建造物保存活動を評価しているが、マーシャルは、コレリにはシェイクスピアの威光を借りて、自身の名声を高めようとする意図もあったと否定的な見解も示している。
3. 当時のコレリ小説への否定的意見を代表するものとして、次のレディング監獄での Oscar Wilde のエピソードは有名である。看守から「コレリは偉大な作家だと思えますか」と尋ねられたワイルドは、「彼女が描いた道徳的なキャラクターに異議を唱えるつもりはないが、彼女の書き方から判断するなら、コレリも監獄に入れられるべきだ」と答えたのである (Wilde 905)。自身も派手な言動で人目を惹いたワイルドに皮肉られるほど、コレリの小説は装飾過多な文体と感傷に過ぎる内容で非難されていたのである。
4. トラスト資料館所蔵のドラマ脚本もオリジナルのコピーであった点を断っておきたい。また資料館での調査により、脚本は Alun John という人物が作成したと考えられるが、現在のところ詳細は不明である。なお脚本にはページ数の記載がなかったため、便宜上タイトルページを 1 頁とし、順次番号を振っていった。本稿記載の頁数はこれに基づく。
5. 本稿で言及する BBC ラジオの番組情報は、1923 年から 2009 年の *Radio Times* に掲載された情報が検索可能な The Genome Project(<https://genome.ch.bbc.co.uk>) に基づく。
6. 1903 年に Methuen 社から大部のパンフレット “The Plain Truth of the Stratford-On-Avon Controversy: Concerning the Fully-Intended Demolition of Old

Houses in Henley Street, and the Changes Proposed to Be Effected on the National Ground of Shakespeare's Birthplace”を出版している。

7. 在野の研究者であるマスターズは、シェイクスピア学者 Dr. A. L. Rowse に勧められてコレリ研究を開始した。マスターズには、英国貴族の歴史や François Rabelais、Jean-Baptiste Poquelin Molière などフランス人作家についての著作もある。

本稿は、科学研究費基盤研究(C)「シェイクスピア生誕地の Literary Tourism——マリー・コレリを中心に」(19K12552)の研究成果の一部である。

引用文献

- Ayres, Brenda, and Sarah E. Maier, editors. *Reinventing Marie Corelli for the Twenty-First Century*. Anthem Press, 2019.
- Ayres, Brenda. “The Story of a Dead Self’: The Theosophical Novels of Marie Corelli.” Ayres and Maier, pp. 157-75.
- Birch, Nick Leigh. “Stratford-Upon-Avon’s ‘Great Little Lady.’” Ayres and Maier, pp. 17-41.
- Briggs, Asa. *The History of Broadcasting in the United Kingdom: The Golden Age of Wireless*. Vol. 2, Oxford UP, 1965.
- Crisell, Andrew. *An Introductory History of British Broadcasting*. Routledge, 1997.
- . *Understanding Radio*. Methuen, 1986.
- Davison, Carol Margaret. “Over Her (Un)dead Body: Gender Politics, Mediumship and Feminist Spiritual Theology in the Works of Marie Corelli.” Ayres and Maier, pp. 137-55.
- Federico, Annette R. *Idol of Suburbia: Marie Corelli and Late-Victorian Literary Culture*. UP of Virginia, 2000.
- Felski, Rita. *The Gender of Modernity*. Harvard UP, 1995.
- Galvan, Jill. *The Sympathetic Medium: Feminine Channeling, the Occult, and Communication Technologies, 1859-1919*. Cornell UP, 2010.
- The Genome Project. <https://genome.ch.bbc.co.uk>. Accessed 3 November 2021.
- Kershner, R. B. “Modernism’s Mirror: The Sorrows of Marie Corelli.” *Transforming Genres: New Approaches to British Fiction of the 1890s*, edited by Nikki Lee Manos and Meri-Jane Rochelson. St. Martin’s Press, 1994, pp. 67-86.
- Kuehn, Julia. “Marie Corelli, the Public Sphere and Public Opinion.” Ayres and

Maier, pp. 61-79.

MacLeod, Kirsten. *Fictions of British Decadence: High Art, Popular Writing, and the Fin de Siècle*. Palgrave Macmillan, 2006.

Marshall, Gail. "Women Re-Read Shakespeare Country." *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture*, edited by Nicola J. Watson. Palgrave Macmillan, 2009, pp. 95-105.

Masters, Brian. *Now Barabbas Was a Rotter: The Extraordinary Life of Marie Corelli*. Hamish Hamilton, 1978.

Noakes, Richard. "Spiritualism, science and the supernatural in mid-Victorian Britain." *The Victorian Supernatural*, edited by Nicola Bown et al., Cambridge UP, 2004, pp. 23-43.

Paulu, Burton. *British Broadcasting: Radio and Television in the United Kingdom*. U of Minnesota P, 1956.

Scott, William Stuart. *Marie Corelli: The Story of a Friendship*. Hutchinson, 1955.

Thomas, Julia. "Bringing Down the House: Restoring the Birthplace." *Literary Tourism and Nineteenth-Century Culture*, edited by Nicola J. Watson. Palgrave Macmillan, 2009, pp. 77-83.

Tracy, Jann. *Marie Corelli: Shakespeare's Champion*. Walking Stork Publications, 2017.

Wilde, Oscar. *The Complete Letters of Oscar Wilde*, edited by Merlin Holland and Rupert Hart-Davis. Holt, 2000.